

分裂で私の見た染色体数は  $n=28$  で、上記の四種で報告されとてゐる数とは異なるものであった。

本研究からは四分孢子形成の際に減数分裂が行われ、四孢子の発生体は  $n$ 、果孢子の発生体は  $2n$  の体であることが細胞学的に確かめられた。私 (YABU, 1976) は紅藻ダルススの四分孢子の発生体とアナダルススの四分孢子と果孢子の発生体で屢々多核の細胞を有するものを観察したが、ウラボソの孢子の発生体では斯様なものは見当らず体は何れも単核を有する細胞より成っていた。

#### 引用文献

- AUSTIN, A. P. 1959. Chromosome counts in the Rhodophyceae. *Nature* (Lond.) 175: 905.
- COYDEIRO-MARINO, M., N. YAMAGISHI-TOMITA and H. YABU. 1974. Nuclear divisions in the tetrasporangia of *Acanthophora spicifera* (Vahl) Boergesen and *Laurencia papillosa* (Forsk.) Greville. *Bull. Fac. Fish. Hokkaido Univ.* 25: 79-81.
- GRUBB, V. M. 1925. The male organs of the Florideae. *J. Linn. Soc. Bot.* 47: 177-225.
- 猪野俊平 1947. 海藻の発生. 北隆館, 東京
- KYLIN, H. 1923. Studien über die Entwicklungsgeschichte der Florideen. *K. Svensk. Ved. Akad. Handl.* 63: 1-139.
- MAGNE, F. 1964. Recherches caryologiques chez les Floridées (Rhodophycées). *Cah. Biol. Mar.* 5: 461-671.
- 斎藤謙. 1962. ウラボソの発生. 藻類 10: 52-60.
- WESTBROOK, M. A. 1928. Contributions to the cytology of tetrasporic plants of *Rhodymenia palmata* (L.) Grev., and some other Florideae. *Ann. Bot. (Lond.)* 42: 149-172.
- 1935. Observations on nuclear structure in the Florideae. *Beih. bot. Zbl. A.* 53: 564-585.
- WITTMANN, W. 1965. Aceto-iron-haematoxylin-chloral hydrate for chromosome staining. *Stain Tech.* 40: 161-164.
- YABU, H. 1976. A report on the cytology of *Rhodymenia palmata*, *Rh. pertusa* and *Halosaccion saccatum* (Rhodophyta). *Bull. Fac. Fish. Hokkaido Univ.* 27: 51-62.
- and K. KAWAMURA. 1959. Cytological studies of some Japanese species of Rhodomeleaceae. *Mem. Fac. Fish. Hokkaido Univ.* 7: 61-72.

#### 梶村光男：第9回国際海藻学会議印象記 9th International Seaweed Symposium.

筆者はこの様な記事を書くのには適任とは思われないが、或る方面からお勧めを戴いたので、それにお応えするつもりで、同時通訳が行なわれたキャンプベルホールに焦点をしばって拙筆を執る次第である。

すでに本誌上で報告が有った様に、この同時通訳は日本語⇄英語の図式で示されるものであり、講演だけでなく質問もただちに通訳されるものであった。通訳は日系米人と思われる男性一人と女性一人が交替で担当した。先ず講演が日本語で行なわれた場合であるが、講演内容についてはあらかじめ講演者側から通訳側に資料を渡して連絡がとられてあったということで、実際の通訳も大体順調に行なわれていた様であったが、スライド説明に入ると講演だけが先行して、通訳とのタイミングが乱れたり、通訳が断片的にしかなされなかったり、通訳がなされないまま進行することも有った。スライド説明についても、あらかじめ相互の連絡を更に密にして、説明の速度をもっとゆるやかにすれば、通訳の効果を一層高め得たものと思う。次に日本人講演者が英語で発表を行なう場合に、通訳側からもしばしば指摘が有った様に、単に通訳の為にだけな

#### Mitsuo KAJIMURA: An impression of the

く、一般聴衆の理解のためにも速度が全般に速すぎたし、英語としては調子が弱すぎる上、音程が低すぎる場合が多かった。つまり、発音やアクセントにはある程度日本語なまりが出て案外理解されるようであるが、日本語のもつ、やさしく柔らかい調子と音楽的要素に乏しい点は、賛美歌が基調にあり、男性言語である英語に慣れた人の耳には聴き取り難い要素となっている。日本語を話す場合にはむしろ失礼と思われるかもしれない強い調子と高い音程と明瞭さだが、英語に慣れた人の耳には逆に誠意と熱意の表現としてひびき、権威あるものとして歓迎されると思う。この様な発表練習は特別な指導や設備はなくても、誰でも容易に出来るのではなからうか。先述の様に、聴衆からの質問も通訳されるので、英語による講演に対する質問にも同時通訳を日本人参加者が活用する余地は有り余っているのを感じた。数千人を収容出来ると思われるあのホールを、外国人による講演の場合には、しばしば聴衆がうずめつくしたのに対して、日本人講演者の場合にはそれが余りに対蹠的であったのは一体何故であったらうか。